

---

# 【東方】兎の決意

TheJ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【東方】兎の決意

### 【Nコード】

N6935H

### 【作者名】

The J

### 【あらすじ】

満月の夜に優曇華は縁側に出て空を見上げる。そこに同じく眼を覚ましたてみが現われ、優曇華の膝を枕に眠りについた。可愛らしい童女の頭を撫でながら、優曇華は追憶に浸る。

## (前書き)

この小説は「東方プロジェクト」の二次創作です。

今回の作品は「400字原稿用紙10枚くらい」という制限のもと作成しました。

一番好きな優曇華で攻めてます。

満月の夜には何故か胸が熱くなる。それは過去に犯した罪に対する戒めなのかもしれない。

優曇華は寝巻きのまま外へ出ると、漆黒の中で自身の存在を強調する月を見上げた。

一点の陰も無い月が放つ黄色い光が、周囲の輪郭を曖昧にさせている。

「れいせん〜?」

「ん?」

眠気に襲われて重たい瞼を擦りながら、てゐが優曇華の側まで歩いてきた。そして、そのまま優曇華の膝を枕にして眠る。

童女らしい可愛い寝顔に笑みを作り、優曇華はてゐの小さな頭をゆっくりと撫でてやった。

「最初は…こんな状況、考えられなかったのにね」

その夜も満月だった。

幻想郷に降りて来てまだ間もない頃、てゐはイジメなんて生半可なものではない、明らかに殺意を持った悪戯を、何度も優曇華に繰り返していた。

「てゐ!」

医者も怒号も掻い潜り、その度に永琳は優曇華の治療を行っていた。

「まったく、あの子にも困ったものね…」

永琳の言葉にも優曇華は大した反応を示さず、俯いたまま包帯を巻かされていた。

「今日は何されたの?」

「……………耳を…切られそうになりました」

「どっち?」

優曇華は頭の横を指で指す。そして、永琳は深いため息を吐き出した。

「やれやれ……どうした物かしらね？」

不死の薬ですら作り出せる永琳でも、てゐの躰だけは苦手らしい。しかし、てゐの悪戯よりも永琳が心配だったのは、まったく抵抗しない優曇華の方だった。

「少しは反撃してもいいのよ？」

「……いえ」

いつも同じ返事が返ってくる。

再びため息を漏らし、治療を終えた優曇華はさっさと部屋を出て行った。

「本当に……どうしたものかしらね？」

縁側は明かりがいらぬ程に照らされている。優曇華はそれは月の光のせいだと悟り、空を見上げた。

そこには影のない、綺麗な満月が悠々と空を独占している。

「……」

素直に綺麗だと思えないのは何故だろう。理由は考えるまでも無く、そして、それを取り払う事は永遠に不可能だ。

「月に帰らないの？」

声の主は意地の悪い笑みで語りかけてくる。

「……もう、帰れないの……」

「じゃあどうしてココに居るの？」

てゐは優曇華の目前まで歩み寄ると、優曇華の顔を覗き込んだ。

「……何でかな？」

「逃げたからでしょ？」

「……」

反論できず、優曇華はてゐを見下ろした。

第三者には、優曇華の瞳は今にも涙をこぼしそうに見えることだろう。しかし、てゐにはそうは見えてないはずだ。

「逃げて逃げて…それでまた逃げるの？ 滑稽よね。月でも逃げ回ってたんでしょ？」

「……そう…かもね」

「かも…じゃないでしょ？」

その言葉に優曇華は胸の中が息苦しくなってくるのを感じた。

痛み。

重み。

苦しみ。

総合して罪悪感。

その言葉に尽きる。

そして、罪悪感から来る傷を、てゐはおもしろがって抉り出しているのだ。でも、優曇華は絶対に抵抗せず、甘んじてそれを受け入れる。否定できる自分は、すでに捨てたから。

「ねえ？ 私と勝負しない？」

「勝負？」

「勝負」

てゐは自信満々にゲームを持ちかけて来た。

それは、竹林の中から竹の花を探し出すというもの。

「あるの？ 竹の花は、百年に一日しか咲かないのよ？」

「あんだ、ここの竹林の規模を知ってる？ 実はね、この竹林には

必ず一本、花が咲いている竹があるの」

「……それを、先に見つけなければならないの？」

「そう」

優曇華は素直にそれを受け入れ、二人は夜の竹林へと向かう。

たとえ満月であっても、そこは不気味だった。

「それじゃあ、よいスタート！！」

てゐの声を合図に、二人は同時に空を掛ける。

「ぬふふ」

てゐの怪しげな笑い声を耳にしたが、優曇華は気にせず竹林の中

へ進んでいった。

どこを見渡しても竹の花は見つからない。

しかし、優曇華はたったひとつある竹の花を探すべく、次々に竹を巡った。

「おい。その兎、ここで何をしてる？」

突如声をかけられ、優曇華は停止する。声の主は紅い袴を穿いた少女だ。

「……………あなたが、姫様と喧嘩仲の紅妹さんですか？」

「なんだ？ あいつんとこの兎か？ いかにも私が紅妹だが、ここで何をしてる？」

「竹の花を探してるの」

「竹の花？ あれは百年に一日しか咲かない花だぞ？」

「ここでは、必ず一つは咲いているのでしょうか？」

「……………それは残念ながらガセネタだ。この竹は、百年に一日、一斉に花を咲かせる」

紅妹は可哀想な兎を見つめる瞳で優曇華を眺めた。しかし、優曇華はそれに動じることなく竹林の奥へ進み始める。

「いくら探しても、無いものはないぞ？」

「……………それでも、あの子があると行って、見つけるのがゲームだと言ったのなら、私はそれを見つける」

「ないものをか？」

紅妹の問いに、優曇華は薄い笑みを見せ、そして言い放つ。

「決めたから」

朝、てゐは永琳に縄で縛り付けられて竹林の前までつれてこられた。

「今回ばかりは黙止できないわね」

「ふ〜んだ」

「さっさと配下のウサギ達に優曇華を搜索させなさい」

艇子でも動かないと、てゐは沈黙を維持する。

呆れてため息を吐いた永琳は、しゃがみ込んでてゐに目線を合わせた。

「どうして…あの子をそんなに嫌うの？」

「……………」

「てゐ」

怒っているわけでもなく、叱っているわけでもない永琳の言葉に、てゐは口を開く。

「だって…見ててイライラするんだもん」

「どうして？」

泣いている子を慰めるような永琳の声。

てゐは目線を永琳に向けて語り始める。

「まるで自分はどーでもいいみたいな感じでさ…何が起きてても何も言わないし…屋敷に居る時だって黙々と言われたことだけやって…馬鹿みたい。自分の事なんて二の次三の次…何がおもしろくて生きてるんだか…」

てゐの言葉に、永琳は眼を閉じるしかできなかった。

自分が言ってもしかたがない、これは、てゐ自身が気付くか、優曇華が自分で言わなければならぬ事だからだ。

しかし、現状を見ている限り、後者はありえないだろう。

「……………」

「…わかった…探してきて…」

てゐの言葉にウサギ達は一斉に動き出すが、竹林に入る寸前で立ち止まった。

不審に思っ二人が竹林に視線を向けると、優曇華がヨロヨロと歩きながら出てきた。

「優曇華！」

永琳は叫んだが、優曇華からの反応はない。

ゆっくりと二人の所まで歩いてきた優曇華は、小さな白い花を、縄で縛られているてゐの頭に載せる。

「え？ コレって…」

「私の…勝ちね」

「どう…して？ え？ なんで？」

そう言つて、優曇華は気絶した。

てゐるは混乱しながら、頭の上に置かれた一輪の花と優曇華を交互に眺めている。

その光景を、竹林から紅妹と慧音は眺めていた。

「やれやれ…一本とはいえ、何千年も続いた竹の歴史を食べるのは大変なんだぞ？」

「悪いな。でも、なんかアイツは昔の私みたいで、ほおっておけなかったんだ」

満月が罪人を嘲笑うかのように優曇華を照らしてる。しかし、さきほどまでの胸の痛みは消え、膝の上で眠るてゐの暖かさに心は快樂さえ感じている。

「いくら探しても、無いものはないぞ？」

「……それでも、あの子があると云つて、見つけるのがゲームだと言つたのなら、私はそれを見つける」

「ないものをか？」

紅妹の問いに、優曇華は薄い笑みを見せ、そして言い放つ。

「決めたから」

次の言葉を聴いて、紅妹は眼の色を無意識に変えてしまった。

聞き違いかと思つた。この少女が兎の妖怪から受けている仕打ちも、幻想郷に居る理由も慧音経由で知っていたから。だから、それは聞き違いかと思つた。だが、優曇華はハッキリと口にしたのだ。

「もう…逃げないって…」

(後書き)

鈴仙ではなく優曇華と表記しております。

なぜかっていうと、「うどんげ」の方が打ちやすいからw

感想とかもらえると幸いですm (\_\_\_\_\_) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6935h/>

---

【東方】兎の決意

2010年10月8日15時20分発行